

関東農政局長賞受賞

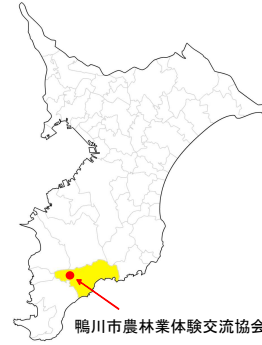
都市と農村のかけはし

受賞者 かもがわし のうりんぎようたいけん こうりゆうきようかい
鴨川市農林業体験交流協会
ちばけんかもがわし
(千葉県鴨川市)

■ 地域の沿革と概要

平成17年の旧鴨川市と旧天津小湊町の合併により現在の「鴨川市」が誕生した。千葉県の南東部に位置し、平均気温が16.2℃と年間を通して温暖な気候で、「長狭米」など知名度が高く品質の優れた農産物が生産されている。歴史に裏づけされた名勝や旧跡、海洋テーマパークなどの観光スポットが点在する観光地でもある。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

国土地理院承認 平14総復 第149号

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

鴨川市農林業体験交流協会がある「みんなみの里」は、鴨川市の西部、長狭地域の中心に位置しており、棚田の景観で有名な、風光明媚でのどかな地区にある。

「みんなみの里」には、農産物直売所のほか、市民農園、温室、駐車場等が用意され、収穫体験ができるハウスも隣接し、鴨川市農林業体験交流協会の活動拠点となっている。

第1表 地区の概要（鴨川地区）

事項	内容	
地区の規模	旧市町村単位の集団等	
地区の性格	機能的な集団等	
農家率 (内訳)		10.6%
	総世帯数	15,868戸
	総農家数	1,676戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家	358戸
	1種兼業農家	162戸
	2種兼業農家	698戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積	19,130ha
	耕地面積	2,260ha
	田	1,870ha
	畑	393ha
	耕地率	11.8%
	農家一戸当たり耕地面積	1.3ha

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア むらづくりを推進するに至った動機、背景

○中山間の悩みと「鴨川市リフレッシュビレッジ構想」

長狭地域は、他の中山間地域と同様に、後継者不足や農業従事者の高齢化、加えて兼業化の進行による農家人口の減少、遊休農地の増加が進

み、棚田や谷津田が多いことから基盤整備等の推進も困難であった。

そのような中、鴨川市は都市と農村の交流による農村環境の保全と地域の振興を目的とした「鴨川市リフレッシュビレッジ構想」を平成7年度にまとめ、総合交流ターミナル施設が長狭地域に設置されることとなった。

イ むらづくりについての合意形成

○粘り強い説明と実践で、地域の理解を得る

市は構想の具体化に向けて、「鴨川市リフレッシュビレッジ推進協議会」を設立したが、推進協議会による説明会が始まった当初は、参加同意がなかなか得られない状況があった。

そんなとき、市内民間企業の退職者が事務局長として招かれた。事務局長は、この構想が『農業者等の地域の人々が主体のもの』であることを伝え、粘り強く説明を重ねていった。

そして平成10年に推進協議会参加者を核として、幅広い関係者が参画する民活団体「鴨川市農林業体験交流協会」が組織され、平成11年3月13日に鴨川市総合交流ターミナル「みんなみの里」が開業し、協会の活動が始まった。



写真1 みんなみの里

その後も沿道の景観整備や農産物販売、各種イベント開催などの実績を重ね、協会は地域づくりの活動を展開、進化させている。

(2) むらづくりの推進体制

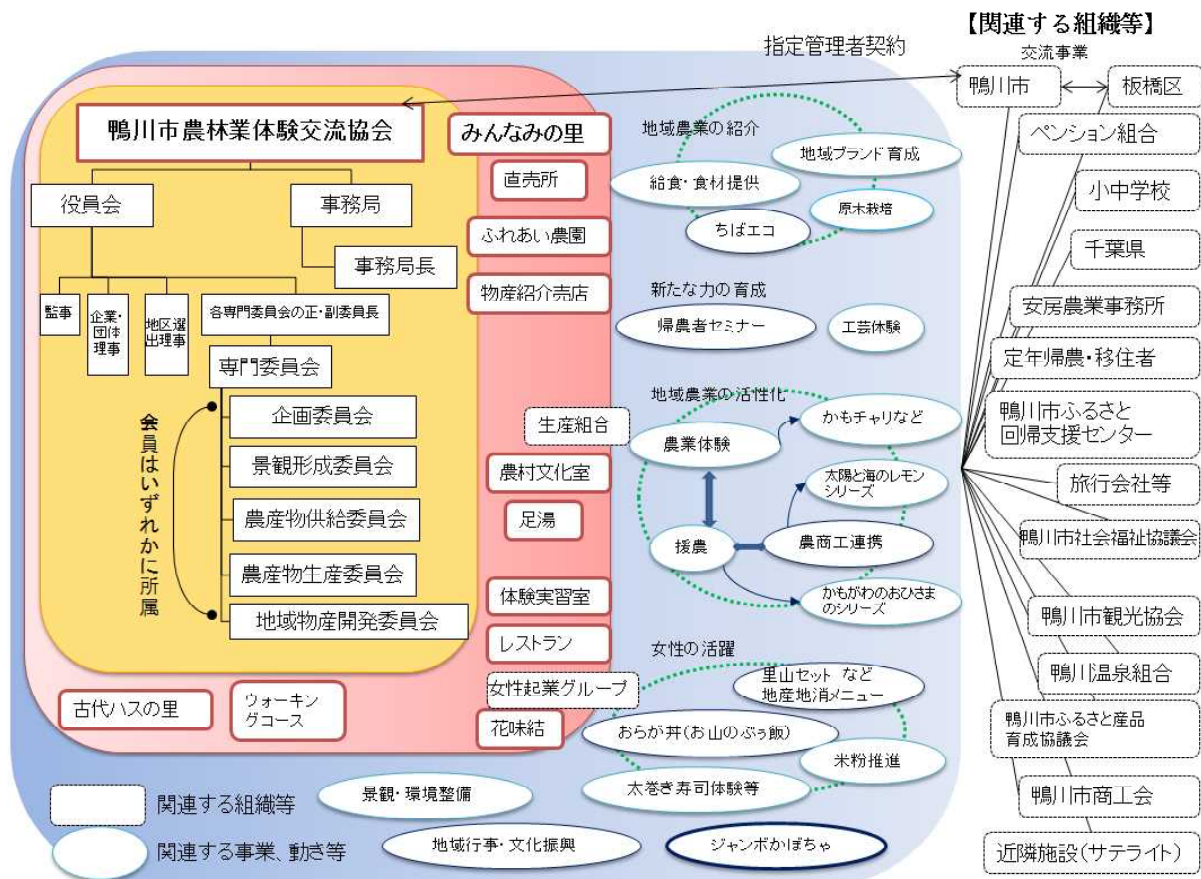
ア 「鴨川市農林業体験交流協会」の組織体制、構成員の状況

鴨川市農林業体験交流協会は、農業者だけでなく食品加工の企業や工芸作家など様々な会員がおり、現在の会員数は380名で、指定管理者として「みんなみの里」を運営している。

協会には専門委員会が5つあり、いずれかの委員会に会員は所属することとなっている。なお、日常の業務運営においては事務局を置き、事務局長に運営の権限を与えている。

イ 当該団体と連携してむらづくりを行う他の組織・団体及び行政等との関係

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

鴨川市農林業体験交流協会は、「みんなみの里」における「直売」「体験」「レストラン」などの運営を中心としながら、地域農業の課題を解決する仕組みを生み出している。

地元産品にこだわった販売や、環境に配慮した生産方式を推進するとともに、帰農者セミナーによる担い手育成、女性起業家の育成、地域おこしを積極的に行っているほか、地域づくりに農林水産業の枠を超えて連携、協力しており、地域の活性化に大きく貢献している。



写真2 直売所

2. 農業生産面における特徴

(1) 当該集団等の農林漁業生産、流通面の活動状況

ア 農林漁業生産、流通面での取組

① 農産物の販売～直売所は地域農業の情報提供窓口

直売所は農業や地域への理解を促し支援者となってもらうための場と考え、「地場産」の直売に徹しており、「食育ソムリエ」の資格を有した販売員を配置し、消費拡大に努めている。

また、「ちばエコ農産物」の栽培を推進しており、直売所内には「ちばエコ農産物」コーナーが常設されているほか、生産履歴がいつでも誰でも見られるよう、直売所の一角にまとめて整理されている。

※「ちばエコ農産物」とは、化学合成農薬と化学肥料の使用量を通常のおお半分に減らして栽培した農産物を千葉県が認証する制度で、栽培履歴の記帳と情報公開が必要となっている。

さらに、平成25年度から地元の在来品種であるえだまめ「鴨川七里」の栽培を手掛け、会員企業が「鴨川七里」を原料とした納豆などを開発することで、生鮮のえだまめが無い時期でもアピールする仕組みを作っている。

それらの取組の結果、農産物直売所は年に約1億8千万円を売り上げ、地域の農業者、特に農作業から離れていた高齢者の営農意欲を刺激している。

活動は市外へ拡大し、東京都板橋区の商店街に開設された鴨川市のアンテナショップで農産物の販売をしている。配送料などの手間はあつものの、区民に長狭地域の紹介をし、農業の支援者となってもらうための取組として実施している。

また、鴨川市では毎月1回、東京都板橋区・荒川区では年4回程度学校給食への食材提供を行うほか、地元鴨川市内のペンション組合に「ちばエコ農産物」等の食材提供をしており、宿泊客から好評を博している。平成25年度からは地元の看護大学学生食堂への食材提供も始めた。

② 加工技術を持つ女性会員達の力を生かして地産地消に取組む

「みんなみの里」の郷土料理レストランでは、地場産品を素材とした料理の提供と紹介を目的に、米粉のケーキなど会員たちの手による多彩なメニューが用意されている。地産地消の取組として開発した“おらが井”「お山のぶう（豚）めし」が人気のほか、工夫



写真3 お山のぶうめし

を凝らした小皿が籠に盛られて出てくる「里山セット」は、平成20年度「地産地消給食等メニューコンテスト」弁当部門において農林水産大臣賞を受賞し、みんなみの里の代名詞となっている。

※おらが井：「おらが」とは房州弁（方言）で「我が家」という意味。市内各店が独自に開発した井をまちおこしに活用している。

③ 会員同士の交流をコーディネートし加工品開発

鴨川市農林業体験交流協会の会員には加工製造の技術を持つ商工業者もいることから、地域の農産物を活かした加工品開発を仕掛ける異業種交流の場となっている。これまでに、長狭米・びわ・いちご等を原料とした商品開発をしてきた。

また最近では、鴨川市産レモンと地元加工業者の開発による「鴨川海と太陽のレモン」の商品群が発売され、「みんなみの里」でも専門コーナーを設けて取り扱っており、人気を博している。

協会がコーディネートすることで、地域内の農商工連携が進み、加工品による地域農業の情報提供ができています。

④ 課題を手段の組み合わせで解決する仕組みづくり

古くからのかんきつ類産地であった当地区では、高齢化や老木の増加が課題であり、収穫期を分散させるための品種転換や援農の受入斡旋などを鴨川市農林業体験交流協会が中心となり推進している。

さらに、収穫作業の軽減対策として観光摘み取りを導入し、観光業者と連携して「総採り」ツアーを開催、剪定作業が困難になった果樹園での「剪定講習会」の実施など、地域内外の支援者による課題解決の仕組みを構築している。

また、ボランティア等による収穫作業を実施し、果実を地域の社会福祉



写真4 農業体験(援農)

法人へ提供しマーマレード等に加工製品化、加工業者が菓子製造、製品を「みんなみの里」等で販売するという仕組みも作った。

農業体験と農商工連携を一体化し、地域内で収益が循環する仕組みを構築することで、地域の活性化に貢献している。

イ 生産基盤の整備と人づくり

鴨川市農林業体験交流協会では農産物の生産技術の向上のため、外部講師を招いて講習会を開催し、実践的な技術の伝達を行うとともに、誰でも参加できる「ちばエコ相談会」を年4回開催し、環境負荷を軽減する技術を広め、生産履歴記帳の徹底を指導している。

営農面では畦畔等の草刈り作業軽減にも取り組んでおり、景観形成を兼ねた解決法としてグランドカバープランツを推進してきた。協会の景観形成委員会が支援することで水仙や彼岸花と組み合わせた景観形成につながっている。

また、「みんなみの里」周辺ハウスで収穫体験を行う6戸の農家で「ながさ観光農業組合」が組織され、団体客への対応や大規模ハウスの設置管理等が可能となった。

ウ 帰農者・移住希望者への支援と女性グループへの支援

鴨川市農林業体験交流協会では定年帰農や若者の受入と定着に向けた取組を行っており、鴨川市ふるさと回帰支援センター主催の「鴨川いきいき帰農者セミナー」を、「ふれあい農園」を舞台に開催している。

セミナーでは、栽培技術の習得を目的に年間20回の座学と実習が行われ、栽培中の疑問等には協会が随時対応している。セミナー卒業後に会員となり、直売所に出荷を始めた移住者もあり、地域の担い手育成のほか定住の促進につながっている。

また、「花味結」という加工場を設置し、女性加工グループが共同で利用できるようにしたことにより、会員は設備の整った施設で食品加工を行うことができるようになった。さらに、「花味結」を利用する女性加工グループのうち、若手中心の組織とベテラン中心の組織が合体する



写真5 祭り寿司体験

ことで、地域の郷土食や加工技術が継承されることとなった。

郷土料理体験などの受入では、複数の女性グループを「みんなみ交流支援あねさま会」として一元化したことにより、原料の共有化が図られ、団体にも対応が可能となり、女性たちの活躍の機会が広がっている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 当該集団等の地域資源整備による生活/環境整備面の取組状況

ア 「みんなみの里」周辺での景観整備など

会員が自ら地域を探索し、文化財や自然景観等の素材を発見して、里山ウォーキングコース2つを整備したことは、地域の歴史や寺社等の由来を改めて学ぶ機会になった。

現在は万葉集に詠われる草木とその短歌を紹介する万葉植物園の整備を進めている。また、休耕地では花を栽培し、景観美化を行うとともに摘み取り園としても利用して多くの人を楽しませている。

さらに、市の委託を受けて「古代大賀蓮の里」の管理を行っており、蓮田ウォーキングなどのイベントの開催や、6月末からの開花シーズンには観光バスの立ち寄り地になるなど、地域景観の保全と観光資源化に寄与している。

レストラン横には鴨川温泉組合の協力を得て「鴨川温泉」を運び足湯を設置し、温泉のPRを行っている。農村風景を眺めながらゆったり過ごせる足湯は観光客だけでなく地元民からも好評で、憩いの場となっている。

イ 地域コミュニティの強化、都市住民との交流等への寄与状況

① 都市農村交流への取組

鴨川市農林業体験交流協会は、体験観光が可能な会員施設や、名所旧跡・散策コースなどを整備し紹介するネットワークの核として機能しており、陶芸体験などの希望について会員施設と調整をするほか、体験場所までの送迎案内などを行っている。

また、農業体験やクラフト体験などのイベントを主催し、レンタサイクル「かもチャリ」で近隣を巡りながら旬野菜の収穫を楽しむなど、「みんなみの里」ならではの体験が人気となっている。各種体験メニューを年間約1万人が利用し、直売所やレストランを含めた「みんなみの里」利用者数は年間27万人にのぼっている。

また、道の駅鴨川オーシャンパークの指定管理者として、管理運営を行っている。

② ジャンボかぼちゃで地域おこし

近年話題となっている地域おこしとして、鴨川市農林業体験交流協会が主催する秋の一大イベントである「ジャンボかぼちゃ千葉県大会」があり、会

員は千葉県大会はもちろん、「日本一どでカボチャ大会」で、平成24年から平成27年まで4年連続で優勝している。

協会では、ジャンボかぼちゃ苗の配布や栽培講習会、畑の貸し出しを行っており、栽培に取り組む人も増え、県内他地域にも取組の輪が広がっている。また、他県から



写真6 ジャンボかぼちゃ千葉県大会

も依頼があれば種の提供や技術指導を行うなど、イベント全体の盛り上げを図っている。みんなみの里に隣接するハウス内では栽培過程を一般公開し、訪れる人は興味深げに眺めている。

③ 地域振興のため文化事業等にも協力

地域文化等の啓発継承への支援も行っており、欄間彫刻で著名な「波の伊八」について物産棟入口に「伊八情報コーナー」を整備し、毎月18日を「伊八の日」として、定期的にPRしながら地域資源として育成しようとしている。

また、みんなみの里近くの吉保八幡神社では、毎年9月に流鏝馬神事が行われ、その宵宮の集合場所としてみんなみの里を開放している。みんなみの里に各集落の山車が集合することで壮麗さが増し、子どもたちも安全に祭りに参加することができるようになった。